『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

思い込み・思いあがり

名畑　崇

皆さん、おはようございます。新しい年が始まりました。今年は一九九六年、平成八年という年が明けました。あと三年いたしますと、二〇世紀が終わっていきます。そして、新しい二一世紀が四年後にきます。皆さん方のなかで今年成人を迎えて二〇歳になられる方は、二四歳になったときに二一世紀に入るわけです。

生まれたのが今から二〇年前というと一九七六年、昭和五一年になるでしょうか。そういう二〇年間を思い返してみますと、今の時代は恐ろしく世の中が変わっていく時にきているなということをこの身に感じます。きっと若い皆さんは、もっと敏感に体に、「えらい時代に私は

生きているなあ」とお思いになっているだろうと思います。かつて人類が経験したことのない、今までの日本の歴史の中でもなかったような出来事が次から次へと起こってくる。そういう大きな変わり目のとき、激動する時代に私たちは生きているのだなという感じが強くいたします。

そういう世の中の激しい動きのなかで、私はいったい何なのか、私はいったい誰なのかということが問われてきます。私が、人が生きていくということとはどういうことなのか。そういうことは一応わかっているようですが、実はわかっていません。私とは何なのか、なぜ生きていくのか、そういうことはわかっているようで、よく考えてみるとわからないということになってくるのではないかと思います。

それで、少し歴史をふり返ってみますと、去年は「戦後五〇年」ということでした。五〇年というと半世紀ですが、一応日本では平和が続いたのです。その間、朝鮮戦争やベトナム戦争がありまして、日本の近いところ、アジアで痛ましい戦がありましたが、日本という国のなかだけは表向きは平和で、その間に経済というものがすごく成長し、豊かな日本ということがいわれてきたのです。

それから、その戦後五〇年より前の五〇年間といいますと一〇〇年前です。去年から数える

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

と一八九五年（明治二八）です。この年に日清戦争があり、日本が中国（清）と戦争をしまして、一応表向きは勝ったのです。それから一〇年経つと、今度は日本がロシアと戦争するという日露戦争がありました。一〇〇年前はそれからもずっと戦争ばかりでした。日露戦争のあとは第一次世界大戦、それから上海事変や満州事変、日中戦争、太平洋戦争という第二次世界大戦など、戦後の五〇年の前の五〇年は、ほとんど戦争でした。

そのようななかでいちばん悲惨だったのは、第二次世界大戦（太平洋戦争）という戦であります。このとき日本の国はたくさんの死者が出たのです。太平洋戦争で多くの犠牲者が出ました。戦場に出て戦死をした人とか戦で傷ついて病気になって死んでいった人、こういった人が全部で二三〇万人です。それから、日本国外の外地へ出かけていって、戦争のために亡くなった民間人は三〇万人おります。一口に三〇万人といいますが、本当に多いではありませんか。日本国内で戦争のために死んだ人は五〇万人います。これはほとんど広島とか長崎での原子爆弾で熱い熱に焼かれて焼け死んだ人、あるいは東京や大阪や名古屋といった空襲による死者です。大都市だけではなく、地方の主だった都市でもすべて空襲を受けて、大型爆弾や焼夷弾で多くの人が亡くなりました。つまり、戦地に出て行って亡くなった兵隊から、日本国内の都会

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行〔京都光華女子大学〕

で爆撃を受けて死んでいった人まで加えると三一〇万人にもなるのです。

世界中で、第二次世界大戦で亡くなった人がどれだけいるかということは正確にはわかりませんけれども、ソビエト連邦だけで二、〇六〇万人が第二次世界大戦で亡くなったといわれますので、世界でいえば五、〇〇〇万人以上の人が戦争のために亡くなっていったということがあるのです。そういうことがあっての「戦後五〇年」だったのです。

そして、戦後五〇年のあいだに、日本は世界に先駆けて経済が豊かになり、みんなリッチな暮らしを求めるようになりました。快適な教室で授業が受けられ、食べものも、着るものも、住むところも、非常に快適に過ごせるようになっております。

今日、私たちの生活、命というのは、世界では五、〇〇〇万人もの亡くなった方がた、日本では三一〇万人もの五〇年前に亡くなった方がたの死のうえに営まれている、支えられているということは、ちょっとそのことについて驚いていいのではないでしょうか。何も考えずに、何も知らずに過ごさないで、ちょっとそのあたりのところに心をとめたときに、「ああ、私たちはこんな生き方をしているのだな。私は二〇年前に生まれて、二〇年間の日本の経済成長のなかで成人式を迎え、成人になった私って何だろう。今まで二〇年間生きてきて、これから私

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

はどうやって生きていこうというのか」と、ちょっとそうしたことに思いを寄せて、驚き、〝びっくり〟していいのではないでしょうか。深く反省しようなどおこがましくて言えませんが、少なくとも驚き、〝びっくり〟するべきことではないでしょうか。

今から二〇年前のことを振り返ってみますと、非常に激しく変わってきたということを先ほど申しました。そのことを知るために思い出してみると、二〇年前の総理大臣は福田赳夫という方でした。この総理大臣は、田中角栄という人がロッキード事件に巻き込まれて総理大臣を辞めたのちに就任しました。その少し前には、オイルショックといって石油生産国が石油を値上げしたのです。それで、日本のように自国に資源がなく外国から輸入をして経済活動を発展させてきた国では、パニックになりました。日本は、どんどん経済成長をし、土地も株も上がるというような状態が一度に水をさされたのです。そのオイルショックの混乱のなかで、福田赳夫という総理大臣が登場したのです。

その頃は一ドルが一九一円でした。去年は一ドル八〇円を割りました。すごいことですよね。今は一ドル一〇五円ぐらいに回復しまして、日本経済が少し息をしかかりましたが…。

総理大臣も何回代わったことでしょう。福田さんのあとには、鈴木善幸さん、中曾根康弘さ

ん。それから平成元年、八年前には竹下登さんで、昭和天皇が亡くなって葬儀を行ったのがこの竹下総理大臣で、年号が平成になりました。今年は平成八年ですが、八年間に総理大臣は八人代わりました。一年に一人代わっています。そして、昨日新しい総理大臣が出てきました。橋本龍太郎さんです。そうすると竹下さんから橋本さんまで、総理大臣は八人なのです。思い出してみますと、竹下さんのあとに宇野宗介さんが出てきました。ごく短いあいだの数カ月だったと思います。それから海部俊樹、宮沢喜一、細川護熙、羽田孜、村山富一、橋本龍太郎の八人になると思います。

こういう言葉があります。「タレント一〇年、総理大臣二年」。歌手や女優などタレントは一〇年はもつけれども、総理大臣は二年しかもたないという意味ですが、平成になると一年しかもたないのです。総理大臣、つまり内閣の顔はそれだけクルクル変るのですが、政治はちっとも変わってきません。

今、社会党と自民党が一緒になって政権を担当するということも、昔とは大きく様変わりをしてきていますが、こういう状態を見ますと、日本の政治はほとんどわからなくなってしまっております。要するに、仕切る総理大臣の顔が変わるだけで、政治が少しも変わってゆかない。

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

それから、政治は何を目的にし、これから日本をどうしていくのかという政治を行う人の理念が見えなくなってしまったというより外はないように思われます。政治理念の喪失ともいえるかと思います。

それから企業とか会社でも、皆さん方のなかで今年卒業していく方は、「超氷河期」といわれるような厳しい状態におかれておりますが、二〇年前にも不況がきておりまして、「新型不況」といわれなぜこんな不況がくるのかということが問題になりました。今回の二〇年後の不況はもっと深刻で、企業が体質を改善しなければいけない、リストラしなければいけないということで、採用をどんどん減らしている状態になっております。

また、ソビエト連邦が崩壊したことにより、社会主義という考え方、人類の一つの理想であったもの、それを目指していこうとする流れがあったわけですが、そのソビエト連邦の崩壊によって社会主義思想というもの、あるいは社会主義の理想が色あせてきました。ということは、一つは人間が何を理想にし、何を目標にして生きていけばいいのかということを見失うことになるわけでして、これはどこに自分の寄る辺を求めていくかという思想、イデオロギーの消失ということを意味すると思います。

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

少し角度を変えてみますと、私も含めた日本の人口が現在どれだけかといいますと、去年の一二月の国勢調査によれば、一億二、五五六万八、五〇四名ということになっております。狭い日本列島の中でこれだけの人数です。正確には計れませんが、世界の人口が五六億といわれています。そのうちの三四億人がアジア地域に住んでいます。そのほとんどが中国とかインドです。そういうなかで日本列島にはそれだけの人が住んでいるのです。そして一世帯の平均が何人かというと、国勢調査によると二・八五人で、初めて一世帯で三人を割ったということになります。いわゆる核家族化が進み、家がどんどん小さく分かれていくのです。お父さんとお母さんと娘と息子がいて、一世帯に四人いたとします。後に、娘さんがお嫁に行って、よその男性と所帯をもって一つの世帯ができます。それから弟は京都の大学へいって下宿をしているということになると、これもまた下宿で世帯をもっています。また、両親は田舎で二人で一世帯をもっている。つまり、一つの家がこうし三つに分かれたということになります。

人口というものは日本でも増えているのですが、世界ではまたどんどん増えています。日本の人口はやや増えていきながら、やがて二一世紀初めには下がってきますが、日本で人口が減らない理由の一つに、平均寿命が非常に高くなったということがあります。現在、男性が七六

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行〔京都光華女子大学〕

歳、女性が八二歳です。日本は世界一の長寿国であるといわれています。

人口増加にともないいろいろな問題が起っています。都市へ、都市へと人口が都市へ移動し、街に住む人口が膨れ上がって過密になっています。それから、農村とか田舎のほうがどんどん過疎化が進んでおります。そして、先ほど申しましたように核家族化というような状態も起こっています。

このような日本における人口の変化は、なかなか目には見えませんが、社会的にも大きな変化を起こしてきています。この五〇年間、日本は農村、田舎がさびれて都会が賑やかになってきたということは明らかでありますが、その農村がさびれてきたとはどういうことを意味するかというと、日本では田畑を耕して太陽の光と雨の湿りを受けて、自然の世界で農作物、米や野菜を作る人がどんどん減っていったということです。そして都会でサラリーマンをしたり、工場で働く人たちがどんどん増えていったということになります。これが人口の都市集中に伴う社会変化です。

田舎が寂しくなると同時に、田舎が都会化してくるということがあります。つまり農村の都市化ということが起こってきていて、そこでまたいろいろな問題が起こってくるのです。これ

は私の経験ですが、私は岐阜県の郡上八幡というところの山奥に生まれ育ちまして、ときどき帰っておりますが、一昨年の一二月に、送電線が切れて村が停電になったのです。昔は、村で水力発電で電灯をともしていたのですが、今は大量に電気を使いますから、都会のほうから高圧線で田舎に上げてくるのです。何万ボルトという電気を名古屋のほうから上げてくるのです。

ところが、岐阜県の山奥にゴルフ場を経営している社長が、ゴルフ場を視察するためにヘリコプターで名古屋から飛んで来て、その途中でヘリコプターがプロペラを引っかけて、送電線を切ったのです。それで一二月二四日のクリスマスイブの日に、私の田舎の山奥の村に電気がこないようになりました。すると、村ではパニックが起こりました。山村の真冬の晩というとても寒いのですが、電気がこないので電気毛布が温まらないわけです。電気炬燵にも火が入りません。夕方からの停電でしたから、電気炊飯器が使えなくてご飯が炊けない。石油ストーブも電気で点火しコントロールしますから、火がつきません。そんなことでお年寄りが凍え、また病院も困ってしまいました。

こんなことは昔はまったく考えられませんでした。山深い農村だったら、昔は山からよく燃える薪が山ほど運べました。それから、私の村は木炭をたくさん焼いて、それを売って生活し

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

ていました。薪とか炭が豊富にあったのです。ところが今、農村、山村には薪も炭もないのです。薪があっても薪を燃やす囲炉裏がない。炭があっても炭を燃やすコンロがない。まったく生活を電気や石油に依存しているために、このように、ある意味で都市化した山奥の山村が、送電が止まったことでパニックになってしまったのです。

ですから、電気や石油だけに依存している自分たちの生活はどういうものかということを、ちょっと立ち止まって考えてみると、〝びっくり〟しないといけないのですよ。電気というものは、火力発電とか原子力発電でつくられている電気です。石油というのは、外国から船に積んで運んできて、買って使っている油です。そのような電気を使って生活をしているのだなあと。

今、暖房の話をしましたが、次に食べ物の話をしたいと思います。今日は一二日で松の内ですから、皆さんはたぶんお正月のお料理を食べたかと思います。若い人たちはお節料理をもう食べなくなったかもしれませんが、なかにはエビや鯛や数の子といったものを口にした人も少なくないと思います。しかしエビにしても、日本人が食べているエビの九〇％は、全部外国で捕れたものを輸入しているわけです。数の子もそうだし、鯛もおそらく瀬戸内海とか日本近海

で捕れたものと思い込んでおりますが、実は鯛までもオーストラリアの沖で捕れたものを急速冷凍して運ばれてきて、大きくておいしい外国産の鯛が出回っているわけです。

日本は海に囲まれた海洋国だなどといっていますが、それは〝思い込み〟です。日本で食べる高級魚のほとんどは外国から入ってきています。日本人が喜んで食べるマグロでも、黒マグロというのは大変おいしくて上等ですが、アメリカで上等の黒マグロ一匹は、クライスラーという高級車一台分の値段で売れるそうです。これは、マグロが今マイナス六〇度に冷凍できる技術が開発されて、解凍すると色も香りも味もまったく変わらないで食べられるということで、高級マグロがぐんと値上がりをするということになりました。そのようなあり様で、日本は世界から魚のおいしいものを買いあさって胃袋に入れているといっていいのではないでしょうか。

それればかりではありません。日本人はグルメということで、世界中のおいしいものを買いあさって集めているだけではなくて、外国までおいしいものを食べに出かけております。グルメ旅行などといって、イタリアとかフランスに、わざわざ外国までおいしいものを食べに出かけるということが、今、普通になってきていると思います。こんなことは日本だけがやっています。隣の中国、インドには三四億の人がいますが、そのアジアの人たちがみんなおいしいもの

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行〔京都光華女子大学〕

を食べて、おいしいものを飲みだしたらどうなるのか。今は私たち日本人だけが御馳走を食べて暮らしているのですが、将来、多くの人類の仲間たちが同じような暮らしをして、同じようなものを食べていくようになったら、どういうことになってくるかということにちょっと思いを巡らしたときに、〝びっくり〟していいのではないでしょうか。こんなことをしていてはいけないとか、贅沢はもったいないというように、モラルということをやかましくいう前に、自分たち日本人の今の生活でこういうことをしているのだなということに、驚いていいのではないでしょうか。ましてや、アフリカとかボスニアのキャンプの中には、飢え死にしていく人たちがいるのです。凍え死にしていく人たちがいるのです。そういう人たちのことを、同じ地球上に住む人間として思いをいたしてみることもあっていいのではないかと思います。

今という時代がどういう時代かということで、一つは、このような今の時代をつくり出してきたもとは、科学の研究と、その科学研究の上に発達した技術というものです。この学校にしても、自分たちの家に帰りましても、石油とか石炭でつくった製品が身の回りにたくさんあります。食べるものも、住むところも、着るものもそうですが、そういう科学技術のすばらしい発達、とくに戦後五〇年において、人類が今まで見なかったような変化が急速に進んできてい

るわけです。

そういうなかで、いわゆる信頼できる科学というものが、恐ろしい破綻をきたして、傷口のようなものを見せています。それは一九八四年の一二月のことですが、インドのドバールというところで大きな化学工場が大爆発を起こして、多くのインドの働く人たちが死んだということがあります。それから一九八五年八月に、日本航空のジャンボ旅客機が五〇〇人余りを乗せて墜落し、五〇〇人以上の死者が出ました。同じ一九八六年、一〇年前の一月に、アメリカのチャレンジャーというスペースシャトルの打ち上げ事故があり、爆発しました。今朝、スペースシャトルがまた新しく宇宙へアメリカのフロリダから打ち上げられましたけれども、一〇年前にはチャレンジャー号が大爆発を起こして、乗組員が全員死亡しました。同じく一九八六年四月には、ソビエトのチェルノブイリ原子力発電所の炉心融解事故がありまして、ヨーロッパでは汚染された空気のために深刻な環境汚染ということが起こってきましたし、去年は、「もんじゅ」という日本の動力炉のナトリウムが漏れる事故がありました。

このようにして私たちが信頼し、それを拠り所としているところの科学技術の粋を集めたところでもって、思いがけないような破綻が起こってくるということです。これもやはり心にと

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

めて、驚いて、科学技術と人間というものがどのように関係していけばよいのかということを問いかけていると思います。

そういうことを考えますと、去年の思いがけない阪神大震災では、六、〇〇〇人以上の方がたが亡くなりましたが、このことについてはいろいろと今後も検証していかなければなりませんが、いくつかの理由があると思います。一つは、やはり人口の都市集中ということがあるでしょう。非常に便利で美しくて住みやすい神戸という街が、戦後急激に復興して発達して、美しい、おいしいものが食べられるファッションの街、そういう神戸であったわけですし、そういうところに多くの人びとたちが移り住んできたということがあります。

それから、新しい神戸のようなモダンな街に建っていた建物が、自然の大きなマグニチュード七・八というような規模の地震になると、もろいものであるということがあります。地震には大丈夫だというふうに設計した建物がもろくも崩れてしまいました。それから、水道とかガスとか電気とか通信、これは科学技術が築き上げたものですが、これがいっぺんに止まってしまったのです。ですから、火災が発生しても水がないから火が消せない。通信連絡網の電話は総てパニック状態になりました。一月一七日という頃だと非常に冷えます。ガスはきません。

電気やガスがくるまでどれだけ日数が経ったでしょうか。

また、科学技術のものとしては、新幹線、電車、高速道路、道路網という交通機関、これがズタズタになりました。今この瞬間にあの地震が起こったら、どんな事態になるだろうかと考えると恐ろしいことです。私が乗ってきた私鉄にしても車で走る高速道路も、ひとつ事が起こればどんなことになるか。ちょっとそういうところに足を止めて考えてみると、〝びっくり〟しなければならない。当たり前の快適なリッチな都市の生活というものがどんなものであるかということに、気がついて驚いてみてもいいのではないでしょうか。

皆さん方は二〇年前に生まれて、そして幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と二〇年間をほとんど学校で過ごしてきたと思います。一九九四年の調べによると大学へ進学する男子生徒が四〇・九％、女子は四五・九％で、女性の方がたくさん大学に進学するようになってきております。男女合わせると四三・四％もの人が大学に進学しているわけです。これが二〇年ほど前になると、この半分も行っていません。皆さん方が今、こうして京都の大学で学んでおられるわけですが、私はいったい大学で何を学ぼうとしているのか、学んだうえで一個の人間としてどのようにして生きていこうとするのか、私とは何かということを、やはり立ち止まって考

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

えてみることも大切ではないかと思うのです。

先ほど阪神大震災の話をしましたが、これはいろいろな受け止め方ができますが、あの震災のために六、〇〇〇人以上の人が亡くなったということを考えますと、生きているということと死ぬということはどういうことかということについて思わざるをえません。私たちは生きること、生きる面、生きるサイドでしか自分を見ていないけれども、死ぬということにおいて自分を見ることも大切ではないでしょうか。生と死は表と裏などといって生きていることが表側で、死ぬのが裏側ぐらいに思っていますが、そうではなくて死ぬことが表であって、生きることがむしろ裏ではないかというぐらいに思ってみてもいいのではないでしょうか。すると今日、健康で無事で生きているということが、むしろ不思議な、ありえないことなのです。ありえないことを「有り難い」というのでしょう。死んだり、事故に遇う。それが普通なのであります。そういうところまで考えなくてはならないということを、あの地震が私たちに問いかけてきているということがあるのではないでしょうか。

歴史という過去を振り返ってみると、地震はたびたびあるわけでして、地震が日本列島に起こった数は限りがありません。ありませんけれども、かえって人口の増加と都市化を遂げてい

くなかで起こる地震は深刻な被害をもたらす。そして被害が拡大し、思いもかけない被害や死が襲ってくるということなのです。むしろこのように産業、工業が都市化しない自然体の農村やそういう地帯における地震は、深刻な、拡大するような被害には及ばなかったかもしれません。このように考えますと、今という時代は、驚くべき〝びっくり〟するような時代ではないでしょうか。

私は以前、この学校で非常勤講師として講義をもたせてもらったとき、鴨長明の『方丈記』を学生さんと一緒に読んだことがあります。それを読みますと、地震とか大火事とか飢饉とか、そして人が死んでいくあり様が克明に描かれております。その中の一つに養和飢饉といいまして、一一八一年に起こった大飢饉があります。このとき親鸞聖人という方は九歳でありますが、この大飢饉が都を襲ったわけです。

この年には、京都のまちの中で夏に寒くて綿入れを着ていますし、夏の盛りに、美濃の牧田庄では雪が降っているということですから天候異変です。たちまち作物がとれなくて大飢饉が襲ってきました。都というところは都市ですから、田舎からたくさんのものが送り込まれてきます。食べ物をはじめ着るものなど、それが全国の飢饉で全部止まってしまったわけですから

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

大変なことになりました。また都という都会には、飢えて困った人びと、寄る辺を失った人びとたちが集まってくるのです。

そういうことで、鴨長明の書いているところによりますと、四月と五月の二ケ月間に京都の中で死んだ人の数は四万二、三〇〇人と書いています。その死者の範囲は街の中なのです。一条より南といいますから今の今出川通よりも南で、九条通よりは北といいます。朱雀大路よりも東といいますから今の千本通よりも東で、それから京極といいますから、かりに今の河原町通よりも西とすると、その範囲、区画の中で、四月と五月の二ケ月間に、道端で死んでいる人が四万二、三〇〇人あったと書いています。

どうしてそれを数えたかというと、仁和寺のお坊さんが、あまりにも大勢の人が死んでいくので気の毒に思って、筆に墨をつけて死者の額に仏様の字を一字ずつ書いていったというのです。それを数えると三万二、三〇〇字書いたから、それだけ死んだ人がいたのだということを書いています。

こうなりますと、生きていくということがどれだけ大変なことか。生きていく者よりも死んでいく者のほうが多いのですから。死と生というのは隣り合わせぐらいのものではありません。

これは死の世界です。死よ驕ることなかれ、本当に死が驕っている、そういう状態です。こういうことは、今日のわれわれは考えられなくなってきているのです。そういう感性が失われてしまっています。

さらに飢饉の例をあげますと、日本列島にはたびたび飢饉がありました。一四六〇年、寛正元年から二年にかけて、これは室町時代ですが、全国を大きな飢饉が襲いました。このときに京都の街の中で死んだ人の数が、これも一月・二月・三月という三ケ月間ほどでしたか、餓死した人の数が八万二、〇〇〇人といっています。どうして数えたのかというと、お坊さんが一人おりまして、亡くなった人を弔うために、箸一本か鉛筆一本ぐらいの小さな塔婆を簡単に削りまして、仏様の字を書いて、死者の上にそれを置いていったのです。八四、〇〇〇本用意をして死者の上に一本、一本置いて回ったら二、〇〇〇本余ったので、八二、〇〇〇人死んだ勘定だといっております。これも京都の街全体ではなくて、街の一部であったようです。鴨川は死人で埋まりました。四条の橋から北側を見ると、川は死人で埋まって大変な腐った臭いが立ち込めていたということです。想像もできないような状態です。今から四〇〇年ほど前です。蓮如上人という方が四六歳の年です。蓮如上人はそういう飢饉を見て、聞いております。

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行〔京都光華女子大学〕

そういうなかで放ってはおけませんから、いろいろな手当てや救済活動が行われるわけです。こういう飢饉が起こってくるときに倒れて死んでいくのは貧しい大勢の人たちで、幕府の将軍やお寺に住んでいるお坊さんたちは生き残っていくのです。京都には五山といって東福寺、南禅寺、天竜寺、相国寺、万寿寺といった大きな禅宗の寺々が幕府に支えられて、大きな伽藍の中で大勢の雲水を養うための米蔵があったのです。そういう米蔵を開けて困っている人たちにお粥を与える施粥ということをし始めたのですが、途中で止めます。キリがないのです。全部与えていたらお坊さんたちの食べものがなくなるので止めてしまったのです。

お坊さんという者は、身を捨てて人を救う者とされます。人を先にして己をあとにせよといいます。お坊さんのもとの理念からいえば、お釈迦様の教えに照らしていえばそうなのです。ところが室町時代のお坊さんたちは、大きなお寺の伽藍の中に僧侶としての生活があって、飢えている人に食物を施し、自分が飢え死にしても最後まで人に施しをしていくというのが仏の弟子の立場だったのでしょうが、それができなかった。これはそういう身分とか地位というものの保証されたお坊さん方の〝思い込み〟です。あるいは〝思いあがり〟といっていいかもしれません。

そういうなかで、願阿弥陀仏という越中のお坊さんが施粥をします。この人は弟子を連れて六角堂で施粥をしましたが、弟子も病気になります。これはほとんど命がけでもって施粥をしたと考えられます。飢饉というのはどういうことか。この願阿弥陀仏というお坊さんが、お粥を炊き出すために六角堂の近くで大きな鍋を一五個つくって、そこでお粥を炊いて施しをしました。そうすると、食べ物をもらった飢えた人が死んでしまったのです。なぜか飢え死にする寸前の人にお粥を炊いて与えたら、次から次へと死んでいったというのです。

ある人がその原因を考えて、お粥を炊いたあと鍋を洗いますが、洗った鍋を北向きに干して置いたと。北向きに向けるということは悪い方角、陰の方向で、縁起が悪い。「これは不吉だ。だからそういう鍋でお粥を炊いて与えれば死ぬのだ」と。だから鍋は南向きの吉の方角に干すのだといいました。戦をするときも北向きに武器を並べると負けるのだというような風説がいわれてましたが、今だったらわかりますね。つまり、極端に飢餓状況になっている人に、欲しいだけ食べものを与えてしまうのはいけないことなのです。少しずつ与えなければいけない。薄く、薄く溶いたお粥を少しずつ増やしてあげていかなければ、一度にその人が食べたいだけ、欲しがるだけあげると胃腸障害を起こして死ぬのです。

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

先ほど戦争の話をしましたが、日本の兵隊がシベリアへ抑留されました。中国の東北部、満州方面に遣わされた日本軍隊の、兵士たちは、日本が戦争に負けたためにソビエトの兵隊に抑留されて、シベリアとかウランバートルなどのそういう寒いところの収容所に入れられて、煉瓦で建物をつくるというような労働をさせられたのです。そういうなかで栄養状態は悪く、食べものは少ない。そういうところで発疹チフスという病気が起こるのですが、これはシラミが媒介するもので、この発疹チフスにかかると高熱が一週間ぐらい続くのだそうです。非常に高い熱が続いて、体力のない人はその高熱のなかで死んでいくそうです。そして丈夫な人だけが治る。一週間ぐらい経つと急に熱が下ります。そうなると急にお腹がすいてきます。高熱が下がったとたんにもう食べたくて食べたくて仕方がないほどお腹がすいてくるそうです。そのときにその病気から回復した人が食べたいだけ食べると、みんな死んだそうです。胃腸がまだ食べられる状態ではないのでしょう。少しずつ消化のいいものを与える。たとえ欲しくても抑えて食べて、少しずつ増やしていかなければ、胃腸障害を起こして死に至ります。そういう人がたくさんいたそうです。

飢えというものがどういうものなのか。私たちは「お腹がすいた」ぐらいしか知りません。

そういうなかで、この抑留されていた人たちの食べものの状態とか、あるいは鎌倉時代、室町時代の襲ってくる飢饉のなかで、多くの人が飢え死にしていった状態ということに心をいたして、今日のわれわれの食生活のあり方を考えると、〝びっくり〟していいのではないかと思います。鴨長明のように木の実だけを食べて、あるいは山でとってきた蔦でつくった着物だけを着て、本当に雨露をしのぐだけの庵に住んでということを、今日の時代に自分に課してみてもできることではありませんし、「こうしなさいよ」といってモラルで押しつけることでもないと思いますが、少しそういう世界の状況とか、人間がどのような歴史をたどって今日生きているかということに思いを至してみたときに、〝びっくり〟するということがあってもよいのではないかと思います。

そのようなことを考えて、今の自分ということを考えてみるのですが、自分の命とは何でしょうか。命というもの、これは丈夫な人もありますし、また健康に恵まれない人もあるのですが、健康とか命というものは、自分で自慢するほど強いものではないと思います。元気でおれるということも、実にこれは不思議なこと、あり得ないことかもしれません。また、一方で命というものは自分が思っているほど弱いものでもないかもしれません。むしろ命というものは、強

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行〔京都光華女子大学〕

いとか弱いということだけでは割り切れないものがあるのではないでしょうか。命というものは自分で受けてみて、自分の命、体というものを見つめてみる、そして自分の体に宿る心の働きを考え、また、自分の命はどこからきたのだろうか、その命を自分は何によって養われているのだろうか、そういうことを思うとき、命というものは強いとか弱いということの他に、その深さということを思ってみてもよいように思えるのです。

そしてまた、自分の命というものはどこからきたのか。それは両親とのあいだに生まれてきたものには違いないけれども、さらにさかのぼって、人類の歴史、あるいは一〇億年前ともいわれる地球の生命の始まりにまで思いをいたしてみたときに、命というものは深いものであり、ずっと広がっていくものだと思ってみてもいいのではないでしょうか。

皆さんはお若いですから、自分の顔だちとか容姿を気にする年頃だろうと思います。この頃、女性が太ることを非常に恐れて、痩せることを願っているようですけれども、そういうことも含めて、自分の顔だちとか容姿というものを思うとき、美しいとか醜いということをすぐに思いやすいと思います。しかし、容姿などは自分一人で思い込んでいるほど美しいものでもなかろうし、また自分で気に病んでいるほど醜くもないものだと私は思います。姿とか顔・形など

というものは、自分が動いて働くなかで、いろんな姿をし、いろんな輝きをもってくるものであり、多彩な面をもつものであるということに気づいてみてもいいのではないでしょうか。

あるいは自分の性格について、いい性格とか嫌な性格とか、また他の人に対してあの人はいいとかよくないとか、そういうことを我々は考えるわけですが、自分の性格は自分が誇るほど良くもないし、また自分で落ち込むほども悪くはないのではないか。性格というようなものは決めてかかるものではない、固定するものではなくて、状況によって、自分の動きによって変わるものである、そういうものではないでしょうか。

また、自分の能力、身体的な能力とか知的な能力ということをよく気にしますが、自分の能力といっても自分が誇れるほど優れてもいないし、自分で卑下するほども低くはないのではないか。そういう考え方を、してみてもいいのではないでしょうか。

要するに命とか自分の容姿、あるいは自分の性格、能力、そういったものは決めてかかる、自分で思い込んで固定するものではなくて、自分が動きながら、自分が働くなかで引き出してくるものではないか。今の時代の状況のなかではつい〝思い込み〟ということをしやすいのでありますが、〝思い込み〟を離れて、本当に自分というものを計る物差しを自分で持てるよう

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行〔京都光華女子大学〕

になること、あるいは自分の〝思い込み〟や〝思いあがり〟で自分を閉ざしてしまわないようにして、自分の気のつかない潜在的な能力や可能性を、自分で見つけ出していくことこそ大切なことではないのかということです。

他と比較することが大切なことではないと思います。今まで歩いてきた日本の経済とか文化というものの中には、比較や勝ち負けを決めるという側面が多々あったのですが、現在おかれている日本社会の状況からして自分とは何者だろう、生きていくということはどういうことか、命とは何かということを考え直してみる、そして、世界に目を広げて、そしてまた人間の歴史というものを省みて、そういう自分の命とか可能性というものに気がつくということが、今、私たちのいちばん大事なことのように思われます。

つまり、命の深さとか広がりということに基づいた本当の意味の人間尊重です。そして、その広がりとはもう今日では、この小さな日本列島だけの小さな国家という感じではとても思えません。広くアジアとか世界とか、いえ、もう地球全体です。地球全体の大きな広がりのなかで命とか、あるいは人間の尊厳ということを見つめて、そして一人ひとりが自分の考え方をもちつつ生きるということが、今、我々一人ひとりに迫られている問題ではないかと思います。

科学技術の発達はたしかに誰もが言うようにすごいことです。人類はロケットで地球の重力圏から抜け出しました。これは、すごいことです。私たちは地球の重力圏がなくては、生まれたり死んだりしないのですが、人類はその重力圏から離れて月世界まで行きました。そして月から地球を見ると、地球は小さなまん丸い球だった、そして青かったということです。あるいは地球には水や酸素や空気がある。このような星は、まだ宇宙には見つかっておりませんが、何億光年という天体の宇宙の広がりの中には、地球によく似た惑星もあるかもしれません。この地球というものを離れて、月から見たときの感動というものが伝わってきます。

最近、若い人たちのあいだでよく読まれているらしいですが、ヨースタン・ゴルゴデという人の『ソフィーの世界』という本の最後に、「ビッグバーン―宇宙の始まり」と題して、私たちも星屑なのだというタイトルが与えてあります。われわれの住んでいる地球というものは銀河系の端くれに太陽系があって、その太陽の周りを回っているのが地球だということですが、その銀河から離れているアンドロメダ星雲、空を見上げればアンドロメダ星雲というのが見えますが、この銀河系の天体からアンドロメダ星雲までの距離が二〇〇万光年といいます。すると、今、夜空を仰ぐとアンドロメダ星雲で輝いているあの光は、今から二〇〇万年前に発した

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

光が現在地球に届いて、それを見ていることになります。つまり、夜空を仰ぐアンドロメダ星雲は二〇〇万年前の過去の姿であるということになります。そういう広大な宇宙のほんの片隅に太陽系があって、たまたま地球という環境ができて、生命が発生して、今日人類が宇宙ロケットで飛べるところまで到達しているわけです。

宇宙飛行士のジェームス・アーウィンという人は、ロケットに乗って地球から月に行って、月に着陸し、月の上を歩いた人です。彼の言葉の中に、彼が月世界に降りたとき、静かで、宇宙は真っ暗であるというときに、ふと後ろに神様がいるのではないかと思って後ろを振り返ったといいます。「おやこんなところに来た。神様が後ろにいるのではないか」と振り向いてみたといいます。それから、月の上を歩いてみて思ったことは、人が月面を歩くということよりも、イエス・キリストが人間界に降りてきたということのほうがはるかに大きな意味をもっているのではないかと思ったというのです。科学の最先端をいくロケットに乗って月に行って、人類の頭の中に起こった考えがそれだった。人類が月に降りたことよりも、イエス・キリストが人間界に降りたことが大きなことだということを私に知らせるために、神が私を月にまで導いたのではないかといっています。

これはキリスト教の世界のことですが、私たちは科学技術の発展のなかで、あまりにもそれを当然のこととして、何の不思議にも思わないで、地球上のことだけ、あるいは島国の日本列島の中だけで、人間ということだけに、生きることだけを思い込んで、思いあがっているわけですが、仏教でははるか昔にお釈迦さまが、この世の世界というものの他に仏の国というものがあることを説いております。それは浄土とか極楽というふうに説かれております。清らかな国土であり、そこには差別もなく、澄みきった清らかさだけの世界だと説かれております。

その浄土が説かれ、仏によって浄土がつくられているということの意味には、さまざまな受け止め方、考え方ができるだろうと思います。ただ、私といたしましては、一つの受け止め方として、人間だけがこの世の世界に生きているものであって、自分だけが営みをしているのだと、そして自分の生命だけ、生きていくという面だけで思い込んで、思いあがっているという、人間に対して〝思いあがり〟、〝思い込み〟というものを考え直させるという意味において、浄土が仏によって説かれていると思ってみると、仏様が人間にモラルを説かれていると受け止めてもいいのではないでしょうか。

今からおよそ一四〇〇年ほど前、五四二年の頃、隣の中国に曇鸞大師という方がおいでにな

『真實心』第十七集平成7年度1996年3月発行（京都光華女子大学）

りました。曇鸞大師は中国の北魏という時代の方で、この頃の人びとは、「仏はいるか、いないか」とか「浄土はどこにあるのか」などといったいろいろな議論に明け暮れてしまっていました。そのような、人びとが自分の拠り所というものを失ってしまった時代に、曇鸞大師はもう今の時代がこうなった限り、人びとの寄る辺というのは、仏の教えを聞いて安楽浄土を願っていくこと以外にないということを教えております。これは親鸞聖人が高僧和讃の中で、

一切道俗もろともに
帰すべきところぞさらになき
安楽勧帰のこころざし
鸞師ひとりさだめたり

とまとめております。今、私たちがこういう時代に生まれて、当然のこと、あるいは、当たり前のこととして思っている命とか生活のあり方とか行動などを一度思い直してみて、そうした私たちの〝思い込み〟、〝思いあがり〟というものを、今一度考え直してみなければならないところに時代がきているのではないかと思います。

少し時間が過ぎましたけれども、こうして最後までお聞きくださいましてありがとうござい

ました。

――一九九六・一・十二――